

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Expedition to Torres Strait

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉本, 尚次 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004652

トーレス海峡諸島調査記

杉本尚次*

「トーレス海峡島嶼民の地理学的・民族学的研究」に参加した。この調査は、アジア大陸と太平洋諸島の接触地域における島嶼民の伝統的漁撈文化・漁民社会の研究を通じて接触地域のもつ文化伝播上の役割を明らかにし、加えて当地域の文化変容の過程を明らかにしようとしている。

トーレス海峡諸島の直接的な文献としては A. C. Haddon を中心としたケンブリッジ大学トーレス海峡調査隊の研究報告があり [HADDON, 1901-1935], 自然、島民の経済、物質文化、社会生活など多岐にわたっている。この調査研究はヨーロッパ文化流入前の、かなり伝統的な島民の生活文化の諸相を伝えており、

1. はじめに

1975年7月1日～9月30日の3カ月間、文部省科学研究費補助金による共同調査

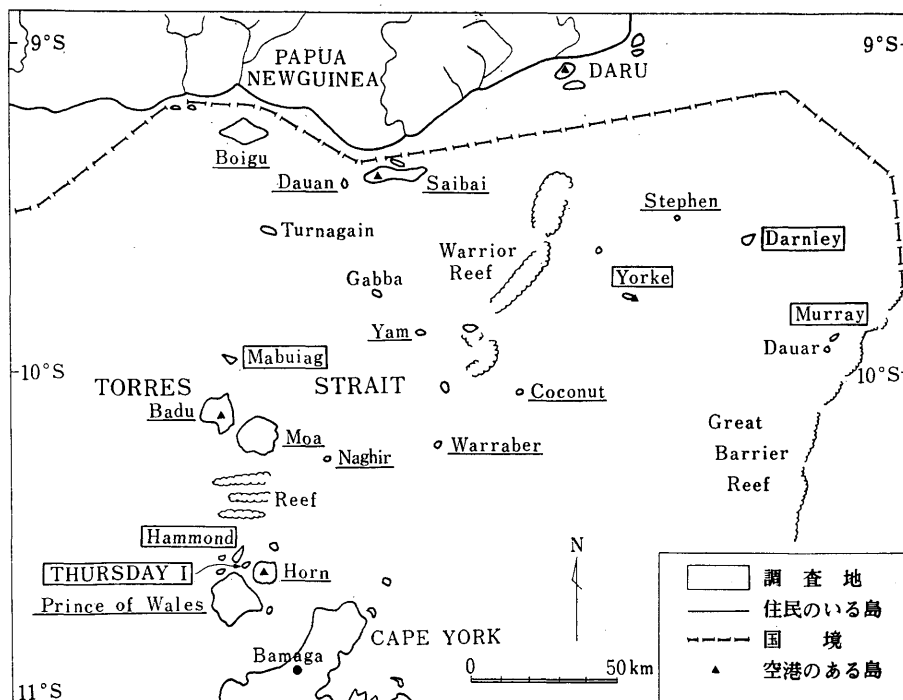


図1 トーレス海峡諸島全図

* 国立民族学博物館第4研究部

今回の調査の基本的文献となっている。これらが20世紀後半の今日、どのように変化し、機能しているかを総合的に調査しようとするのである。

トーレス海峡は、ニューギニアとオーストラリア大陸にはさまれた海峡であり、珊瑚礁が多く、数多くの島々が散在している。行政的にはオーストラリアのクイーンズランド州に属している。戦前日本人出稼ぎ漁民の採貝業で著名な木曜島に連邦政府と州政府の原住民局があり、地域中心となっている。

調査隊員は藪内芳彦（関西大学文学部教授）を隊長に、大島襄二（関西学院大学文学部教授）、島田正彦（立命館大学文学部教授）、筆者の4名と、大阪市立大学大学院生松本博之、関西学院大学大学院生瀬川真平からなっている。そして現地参加のラトロープ大学（メルボルン）で社会人類学を講ずる北大路弘信氏。それから和歌山県立新宮商業高等学校の久原修司教諭が和歌山県出身出稼ぎ漁民研究のため特別参加することになった。今回の調査は現在資料を整理中であり、毎週研究会を開いて問題点の析出、討議を重ねている。いずれ機会をみてまとめたものを報告しようと思う。この調査記は、調査日記の中から数カ所をとりだして整理したものである。なお帰路訪問したオーストラリアの野外博物館 Old Sydney Town についても言及している。

2. キャンベラ

7月1日大阪を發ち、ホンコン経由で3日雨のシドニーに到着。機内では冬仕度がはじまっている。1974年西サモア再訪時に立寄ったのに引続いての来訪である。

トーレス海峡の島々への調査入域許可

の件で藪内隊長は院生の松本君を連れてクイーンズランド州原住民局との交渉のためブリスベンへ急拠飛ばれた。我々はオーストラリア国立大学との連絡や文献収集のためキャンベラに向うことになった。

キャンベラ空港にはオーストラリア国立大学 (ANU) 太平洋地域研究所人文地理学教室の助手の人達が出迎えてくれる。大学はキャンベラ人工湖の北側にあり、広々とした緑に包まれたすばらしい環境。宿舍のブルースホールは学生の寮だが、外来の人も宿泊させる。2時にANUの太平洋地域研究所の人文地理学研究室に R. G. Ward 教授を訪ねる。

Ward 教授には、1966年第11回太平洋学術会議の時東京で会ったが、その後ポートモレスビーにあるパプア・ニューギニア大学を中心に調査研究を続け、現在は人文地理学部門の主任教授である。トーレス海峡諸島調査のことなどを報告し、アジア経済研究所から留学している地理学の谷内氏とも会う。

Ward 教授は地図室を案内されたが、地図類の整理は完璧に近く、数名の専属者がいて学位論文の地図も作製することであった。トーレス海峡地域の地図は20万分の1図をポートモレスビーで入手していたが、5万分の1地形図は参考になる。大縮尺の地図は各州の土地調査局で販売しているので、ブリスベンで入手しなければならない。

図書館は一般学生と研究者用（大学院を含む）とに別れている。後者は太平洋地域研究所の近くにあり、キャンベラ滞在の3日間に時間をみつけてトーレス海峡諸島関係の文献を調べた。ゼロックコピーも数カ所に置いて随時利用できる

よう配慮されていた。

トーレス海峡地域に関する文献では、探検関係のものが圧倒的に多い。学術書としては、前記 A. C. Haddon らの研究が詳細を極めているが、他に J. R. Beckett の研究 [BECKETT, 1963], W. Laade の北部トーレス海峡諸島をフィールドとした研究 [LAADE, 1971] などを見る。M. Lawrie のトーレス海峡諸島の神話と伝説集 [LAWRIE, 1970] も参考になる。

ANU 太平洋地域研究所が行なった一連のトーレス海峡地域に関する研究の成果として、D. Walker らのオーストラリア大陸とパプア島間の自然的、人文的諸関係を論じたもの [WALKER, 1972] や H. Duncan らのトーレス海峡諸島民研究 [DUNCAN, 1974] などがある。前者は入手済み、後者は Duncan はか数名の研究報告が現在 5 冊まで出版されており、ANU から調査隊に寄贈された。この調査はトーレス海峡諸島の社会、経済、人口、国境問題等々現状分析であるが、調査地としては、サイバイ、バドウ、ヨーク、マリーの 4 島を中心としたものである。

キャンベラ第 2 日目に谷内氏の案内で市街巡検。広い大学構内を出て都市計画で有名な放射環状街路のセンターであるシティを通る。人工湖の北側にある小山にのぼると市街地の平面的ひろがりの大きさがよく判る。山頂から真下に戦争博物館、そしてアンザック・パレードは美しい道路、人工のバーレイ・グリフィン湖を通して対岸の国会議事堂、その背後の小丘がキャピタルヒル。キャンベラ都市計画の中軸部である。人口はやっと 16 万人に達したが、本格的な町づくりは 1958

年 NCDC (National Capital Development Commission) が活動を開始して以後と言われ、人工湖に水が入ったのもその頃になる。市街地を離れると牧場がひろがっている。

キャンベラの都市計画の歴史を展示した NCDC の Canberra Planning Exhibition は湖畔にある小さな建物。原野の時代から今日の町づくりまで手際よく展示している。案内所にある数枚の写真、図入りの資料も参考になる。オートスライドによるキャンベラの発展過程の解説もよくまとまっている。

国立図書館のホールに展示されているクックの日記なども貴重。戦争博物館は石造のどっしりした建物。展示は第 1 次大戦に主力をおき、濠軍のトルコ出兵など写実的模型はかなり迫力がある。第 2 次大戦関係では日本軍の軍旗、千人針、国旗への寄せ書、占領下の立札、日本刀など数多く展示されている。ベトナム戦争までオーストラリアの歴史と外国との戦争に関する展示である。中庭に面した壁面に戦死者名が刻まれ、静かな雰囲気をつくり出している。屋外展示としては戦車やシドニー湾で捕獲された日本の潜行艇が注目を集めている。

その他キャンベラで訪ねた博物館としては、ANU の Institute of Anatomy の中にある民族誌関係の展示場が印象に残っている。オーストラリアアボリジンの資料を中心としたもので 31 ケースあり、部族の分布図、住居、漁具、ブーメラン、彫刻類、石斧、原始絵画などと言われて注目を集めている樹皮絵画。ヨーク半島のアボリジンの展示も興味がある。必ずオーストラリアの地図があり、展示物の出所を明示している。パプア・ニューギ

ニアのものもかなりある。

キャンベラでは北大路弘信氏と会う。現地参加者として金沢大学の畑中幸子氏が推薦してくれた人。国際キリスト教大学を卒業後アメリカ合衆国テキサス大学で社会人類学を専攻し、オーストラリアに来て6年になる。学位論文は移民研究と社会変動論。現在メルボルンにあるラトロープ大学講師。今回の調査ではマリ一島で親族呼称を中心とした調査を担当することになった。

キャンベラの冬は厳しい寒さで、600mの高地であり、谷内氏によると信州の冬とよく似ていると言う。とくに33°C酷暑のホンコンから直行したので寒さは格別であった。

3. 木曜島へ

ブリスベンでクイーンズランド州政府原住民局を訪ね、土地調査局で5万分の1地形図などを入手する。タウンズビル、ケアンズと北上する。もう熱帯圏である。早朝のケアンズ空港には白人に混って縮毛のメラネシア系住民、筋肉たくましいトーレス海峡島嶼の人たち（アイランダー）が目立ち始める。

フレンドシップ機は5時50分薄明のケアンズを飛びたつ。ここからオーストラリア山脈を越えるのだが、ヨーク半島部ではかなり低山性となっている。岩山のみえるところもある。盆地状のところは低く雪がたなびいている。樹相は熱帯雨林でなく、やゝ疎らなところもある。2時間半余飛んで東海岸がみえはじめる。煉瓦色のラテライト土がひろがり、ウエイパに着く。ここは世界的ボーキサイトの産地である。海岸に工場がみえ船舶の接岸している棧橋。大半日本へ輸出する

のだ。

機は海岸沿いに北上する。蛇行河川、沿岸州、河口の土砂の堆積、砂州や河川沿いの植生、古い砂丘などが観察できる。バックマーシュ、マングローブ樹林などみごと。オーストラリア大陸北端近いカニ形の砂州がみえはじめるとまもなくエンデバー海峡にかかり、プリンスオブウェールズ島の山々が、そして木曜島の集落、その西側の金曜島が視界に入る。やがてホーン島の空港に安着。遂にトーレス海峡地域にやって来たのである。

さすがに陽射しは強い。ユーカリ樹林の中に蟻塚が奇異な姿をみせている。対岸に木曜島のみえる棧橋までバスが運んでくれる。海の色は鮮かだが少し濁った感じ。連絡船は目前に木曜島がみえているが、リーフを避けるため大きく迂回する。木曜島には3本の棧橋があるが、丁度トーレス海峡の島々へ物資補給をするメルビディア号が停泊している。ダイバーボートが入港している。中には日本船籍でもないのに日の丸様の装飾をつけた船がいる。トーレス海峡西部諸島で勢力をもつ Tanu Nona 家経営の船という。暑いと東南の貿易風が一日中吹きつけているのでしのぎよい。先着の藪内隊長ら

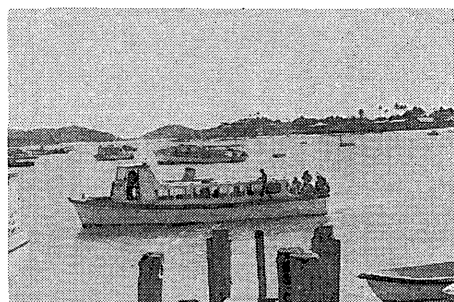


写真1 木曜島ポートケネディ
手前は連絡船、後方はダイバー船など

と合流し、メインストリートのダグラス通りに面したレインボウホテルに到着く。このホテルは和歌山県串本に近い有田出身の藤井富太郎氏の娘さんが経営している。

木曜島は、トーレス海峡の行政上の中心地でもある。3.24 km² の小さな島だが、4,000人余の人口のうち2,400人が集まっている。木曜島は東側にミルマンヒル、西側にグリーンヒルがあり、島の周囲をリーフがとりまいている。市街地はポートケネディとよばれ、かなり計画的に区画されている。連邦政府、州政府、病院、公民館、郵便局、商店街（中国系多し）、青空映画館、教会（カソリックと英国国教会など）、小中学校、5つのホテルなどが集まり、地域中心的機能を備えている。住宅は背後の山腹までのびている。丘陵性山地を越えると島の西北側に島民を集めた新しい村落タモイがある。北側のスロープはユーカリ樹などが散在しており、墓地がある。とくに日本人墓地が数多くみられる。海岸はマングローブ林があり、東北岸にはエビ工場や結核療養所。ローズヒルとミルマンヒルの間の低地は貯水池となっている(図3)。トーレス海峡諸島調査地への入域交渉は、州原住民局の許可と各島の村会の許可が必要なのだが当初かなり難渋した。調査許可がまず近くハモンド島について出た。他の島に関しては大島教授が7月末、北大路氏が8月初旬に木曜島に着き、交渉も好転して希望する島への調査が2名ずつ2週間を一応の限度として許可されることになった。このようにしてトーレス海峡諸島の中でマビオグ島、ダーンレイ島、ヨーク島、マリー島で分散調査をすることになり、その日程表が作成さ

れた。筆者は調査本部を受持ち、木曜島とハモンド島および付近の島々の調査を分担することになった。また藪内隊長らは政府物資運搬船メルビディア号で、ニューギニアに近いサイバイ島・ボイグウ島などの巡検にも出かけた。

調査本部(宿舍)は8月に入って山腹の美しい Hocking 山荘に移った。Hocking 氏は戦前から戦後にかけて真珠貝採集などで財をなした人、その息子のために建てた邸宅が現在 Pearls PTY (真珠会社～日宝真珠と合併)の手に渡り、居住者の留守期間中に利用させてもらうことになった。自炊だが山荘での快適な生活は忘れられない。

4. 木曜島と日本人

木曜島といえはまず戦前の日本人海外出稼ぎ漁民の活躍が思い出される。19世紀末シロチョウ貝の宝庫だったトーレス海峡は、その採集で盛況をきわめた。ボタンや装飾品の原料として好況であったという。木曜島はその中心地だったわけで、日本からも明治初年から出稼ぎ漁民が集まり、潜水技能にすぐれた日本人ダイバーは注目された。前記の日本人墓地は、これら出稼漁民たちのものであり、潜水病などの事故によって死亡したケースが多いのであった。久原修司氏の調査によると日本人墓は716基。20才代53%、30才代28%、40才代8%となっている。しかも日本人ダイバーの7割は和歌山県南部の出身者なのである。

我々が宿泊したレインボウホテルの藤井富太郎氏(通称トミイ)は、戦前の出稼漁民の「生き証人」とも言える人で、屢々話を聞く機会があり、多くの資料を提供してもらった。また当時の日本人関

係主要建物の位置を調査するため藤井氏の案内で地図に記入しながら検証した。

ダグラス通りに面して広島ボーディングハウス（ボーデンハウス）があった。ここは広島県出身のダイバーが宿舎にしていたところ。和歌山県の場合、人数も多く、出身地区別にボーディングハウスがあった。宇久井、出雲（潮岬）のボーディングハウスもダグラス通りに面していた。日本商品を扱う商店もあった。通訳や裁判などで活動したサトウ商会跡。1900年当時の木曜島主要建物絵図にあるサトウ商会であろう。ダグラス通りを東へ進むと郵便局の前辺りに日本人会館だ

った建物が残っている。現在ベランダを後補して住宅となっているが、急勾配の切妻屋根に日本人大工の手法をしのぼせる。海岸に沿って東へ三輪崎（新宮市）ボーディングハウス跡。現在空地だが戦前最も大きな宿舎だった。この辺り以前は砂浜海岸でダイバー船から小船で上陸しやすかったと言う。中央棧橋は新しく構築中だが、もう100年の歴史がある。日本人経営の造船所まであった。図2に示した地区は日本人街（ジャップタウン）とも言われ、ボーディングハウスだけで串本・周参見・上野（潮岬）・伊予とあり、マンゴーの樹蔭にタイル張りの浴槽が残

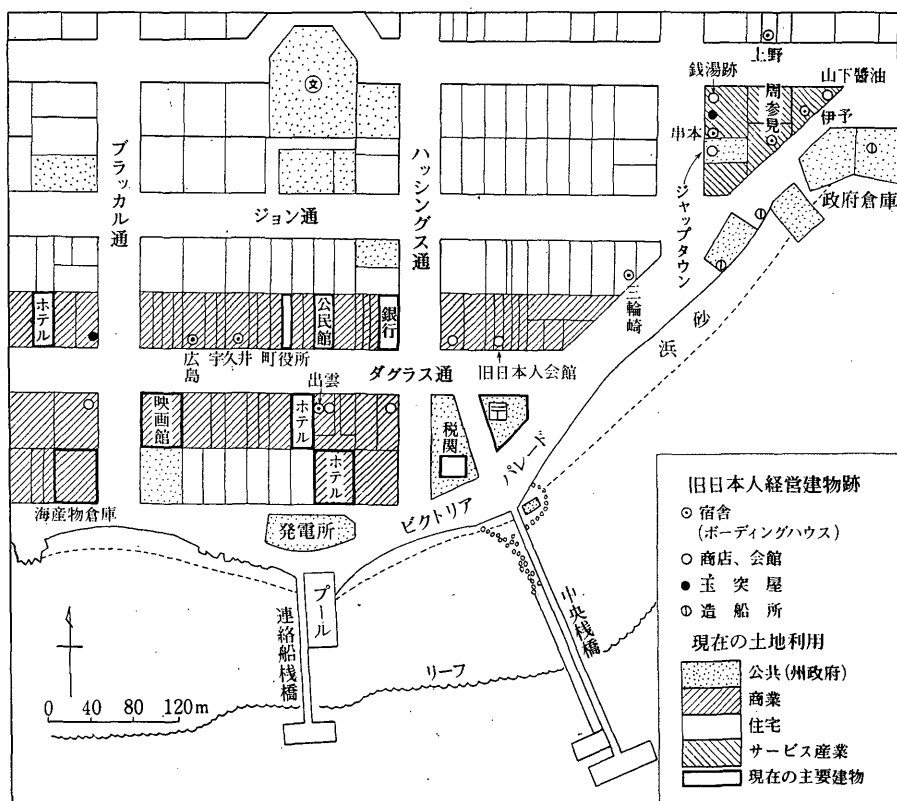


図2 旧日本人関係建物跡分布——木曜島街区（ポートケネディ）——

っている。日本人専用銭湯跡（藤井氏が来島した1925年にはすでに廃業）、玉突屋、商店、醤油製造所もあった。オノブ、オヨネさんなど娼婦も存在したと言う。

藤井さんは1938年木曜島で現地の女性ジョセフィンさん（中国人とアイランダーの混血）と結婚。他に4人の日本人が現地女性と結婚している。太平洋戦争と同時に日本人全員をヘイ（シドニーからオーストラリア山脈を越えた内陸部）の収容所に送り、戦後日本へ送還したが、妻帯者（現地女性）のみ木曜島に帰ることを許された。なお戦後米施政下時代の沖縄からダイバーが来たが、そのうち2名が現地女性と結婚して木曜島に住んでいる。現在30人の日系二世がいるが、ほとんど日本語は話せない。かつて繁栄したシロチョウ貝採集も、戦争による打撃とプラスチックなどの登場でボタン原料であった需要は激減している。

現在日宝パールなど3社がオーストラリアとの合弁で真珠養殖を行っており、藤井氏もこの方面へ関心向けつつある。真珠会社の浜口繁次氏らには種々御協力頂いたが、真珠会社の日本人技術者の多くが志摩半島の出身者である点も、わが国真珠養殖業の発展形態として興味深いものがある。

ヨーク島の調査をされた大島教授をはじめ各島での調査報告を聞くと、共通してトーレス海峡の島々の人たちが我々日本人に対して好意をもっていることが明らかになった。これは戦前の日本人ダイバーが島民を差別せず採貝について親切に教示したこと、島の慣習などをよく守ったこと、日本人もトーレス海峡の島々と同じ島国の人間であるということなどが原因のようであった。日本人とトーレ

ス海峡諸島の人々との心の交流は現在でも生き続けていたのである。

5. ハモンド島

ハモンド島は最初に調査許可のおりた島。まず全員で調査をはじめることになった。島に住みこむ場所がないことと、木曜島に近いこともあって、通勤でなら許可ということになった。村長のJ. Sabatino が毎朝8時半小学生らを木曜島まで運んでくる。船外機2基をつけた平たい船。子供達を運んだ帰りに我々をハモンド島へ。帰りは4時で、子供達を迎えに行く時便乗するわけである。棧橋がなく膝まで水につかって乗船。島は目前にみえているが、この水道の潮流が凄く速く、リーフがあって迂回する。ハモンド島も砂浜に船を着けるので飛び込んで上陸。6月～9月は東南の貿易風が強く、海は連日荒れている。12月～4月は北西風になり、島の東南側は凪になる。ハモンド島を最初に訪ねた日、丁度海浜でジュゴン（海牛目の海獣、人魚）を解体していた。2m近いものだがすでに解体が進み、犬たちが集っている。肉を幅10cm、長さ50cmほどに上手に切って分割している。ジュゴンはトーレス海峡



写真2 木曜島へ通学するハモンド島の子供たち



写真3 ジュゴンの肉を分配する
ハモンド島民

西部、インドネシア海域、アフリカ東岸辺りに棲息しているが、自然保護の立場から捕獲が許されるのは島民たちだけである。ジュゴンは海藻を食べるが、音に敏感だから、村人は月光をたよりにボートで慎重に接近し、銚竿と共に飛びこんで打込み捕獲する。分割したジュゴンの肉をスピードボートで木曜島へ売りに行く者もある。昼食に Sabatino 家でジュゴンの御馳走になったが、ショウガとニンニクを加えて煮たもの。鯨肉と牛肉をミックスしたような味であった。ジュゴン料理としては、後日木曜島で食べたてり焼が最も美味だったように思う。

海亀も島民のみに捕獲が許されている

が、9月から捕獲シーズンに入る。ジュゴンと海亀はトーレス海峡の島人たちの御馳走であり、婚礼祝などには必ず料理している。しかも料理法は穴を掘り、葉に包んだジュゴンの肉。焼石を入れ、バナナの葉などを重ね、土を覆せて蒸し焼にする伝統的なカプマリである。

ハモンド島は木曜島より大きい島で、東南部海岸に家屋が並んでいるが、その背後の丘の上に石積みの教会が建っている。円窓にビールびんを詰めこんでステンドグラスの代用にしているのも面白い工夫。カソリックの島で、トーレス海峡の島々から信者を集めて新しく村づくりをしたのである。Sabatino 家はハモンドの集落から海岸沿いに少し離れている。立派な高床式の民家。ブロック積みの家も4戸あるし、連邦政府資金による民家もみられ、ココヤシの葉などを材料とした伝統的な民家はみられない。ハモンド島ではまず簡易測量による1000分ノ1村落図を作成したが、強い陽射しと強風で大変な作業であった。

教会のある小丘の内側にも集落があり、風車で水を汲みあげる風景もみられる。平坦な盆地状の地形だが、古くは北側か

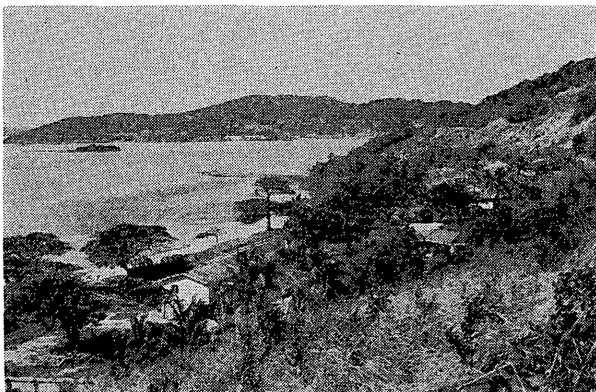


写真4 ハモンド島海岸部の
集落景観

対岸は木曜島、リーフの
発達が著しい

らの入江であった可能性もある。集落背後はパンダナスの点綴する草原状(乾季)をなし、大きなトカゲなどをみる。丁度山地と山地(花崗岩の露出がみられる)の間の低地部にあたり、野生化した牛や豚の糞が散在している。マングローブ林がかなり内陸部まで入りこんでいる。北西岸に出ると一面マングローブ林で、ワニの出現するところと言う。島の北部は

やはりパンダナスやユーカリ樹林で、赤味がかった土(ラテライト)が多く、大きな蟻塚が分布している。屋敷にマニオクなどを植えている他には耕地は全くみられない。

Haddon の報告によると、木曜島周辺の島々は無住のものが多いと言われる。ハモンド島も集落形成の歴史は比較的新しい。ハモンド島に住む Francis

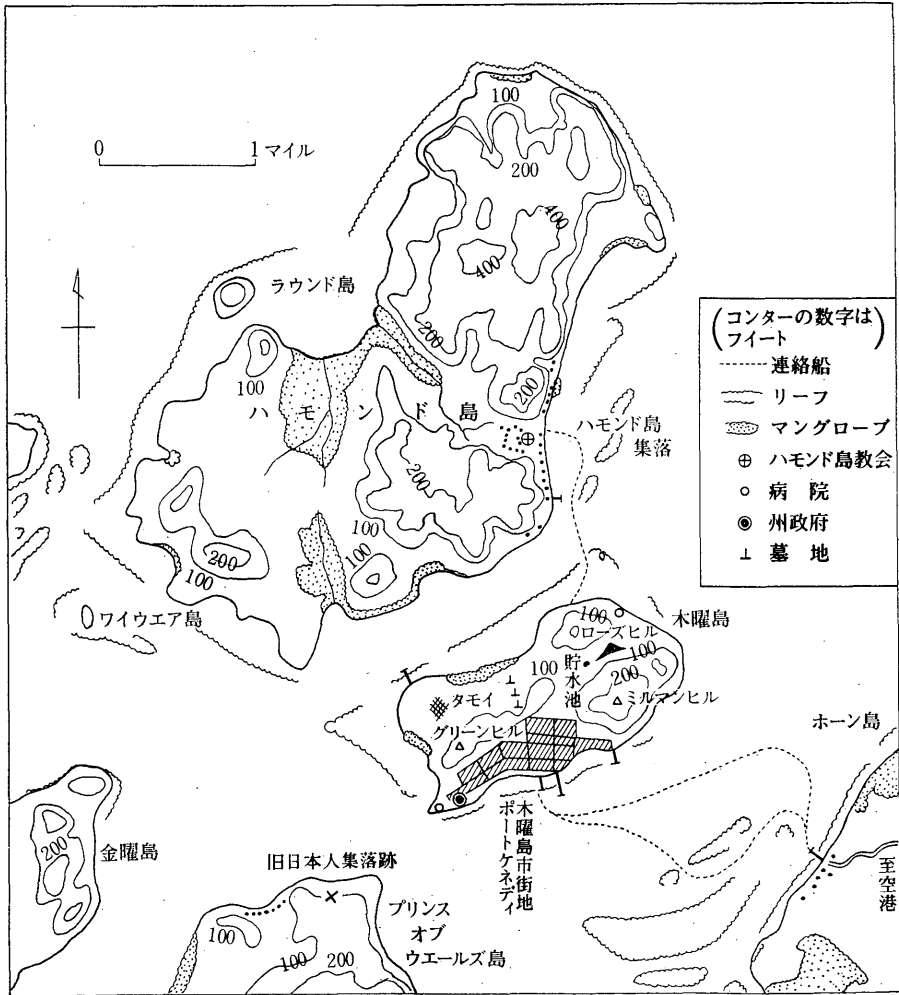


図3 木曜島・ハモンド島現況図

Dorante 夫妻によると1920年代には先住者がいたが、悪事を働いたとて政府が追放し、そのあと教会によって管理させたと言う。戦前(1928以後)、ハモンド島に来住したものは **Kanak** 家(ダーンレイ島より)、**Sabatino** 家(ヤム島より)、**Sebasio** 家(ダーンレイ島より)と言われ、1928年ハモンド島にカソリック教会が開かれた。その後トーレス海峡の島々からカソリック教徒が、あるいはカソリックに改宗した人びとが集まって集落を形成したのである。他の島々に比べると特異な性格をもった寄合世帯的な島である。なおハモンド島の集落は戸数29戸、人口160余の規模である。

人種的にはトーレス海峡の島々全体がメラネシア人種に属しているが、著しく混血が進んでいる。ハモンド島はそれらトーレス全域から集まってきたため、形質的にも毛髪は縮毛から直毛に近い形まで各種。皮膚も暗黒色から褐色とバラエティにとんでいる。さらに家族調査を進めていくとこのことが明確になってくる。

例えば **Francis Dorante** の場合、彼の父はフィリピンのサマル島からダイバーとしてトーレス海峡のダーンレイ島に来住、やがて近くのネフィアン島に移り、**Francis** の世代になってから(戦前)、ハモンド島に来ている。母はマリー島出身でニューカレドニアの血も入っていると言う。**Francis** の妻はダーンレイ島生まれで、父は英国人である。村長 **J. Sabatino** の場合、祖父 **Nicholas** はフィリピンのパナイ島イロイロ出身でダイバーとしてトーレス海峡に移住し1928年ハモンド島に来ている。**Louis Garnier** はココナッツ島生まれで、父はフランス人、母はワラビー島民。妻はヤム島民で1950

年ハモンド島に来住している。この他ソロモン、ロツーマ、サモア島などからの流れもある。

19世紀後半、東南アジア(フィリピン)、南太平洋の島々(メラネシア・ポリネシア)、ヨーロッパからシロチョウ貝を求めてやって来た人々、さらにキリスト教の布教活動も無視できない。

Haddon の調査した時点から80年余、この間に混血はさらに進行し、新しい混血種としてのアイランダーズが形成されているとも言えよう。

彼らアイランダーズは誇り高き人々であり、オーストラリア本土のアボリジンやパプア・ニューギニアの人々に対して一種の文化的な優越感をもっている。

オーストラリア政府は10年前にトーレス海峡の島々を「リザーブランド」に指定している。このため入島許可が必要だし、これが調査手続を手間どらせた原因となった。現在連邦政府と州政府はトーレス海峡諸島民に対して援助合戦を展開している。多くの家に冷蔵庫、ガスレンジが普及しているし、住宅も連邦、州、教会の援助で建ったものが多くなっている。養老年金、子供手当、未婚の母手当等々社会保障も手厚い。

調査も後半に入った9月5～6日、本土のヨーク半島にあるバマガで「バマガ・ショウ」と言う一種の祭りが開催されたが、木曜島からもメルビディア号をはじめ各種の船で島民や白人がおしかけた。私も出かけたが、これも政府で創りだしたおしきせの祭りであった。祭り自体活気がなく何かシラケたムードがあった。

離島の人々を移住させ、新しい開拓集落をバマガに作りつつあるが、これも島の人々が全面的に賛意を表しているよう

には受け取れなかった。パプア・ニューギニアの独立が9月16日に行なわれた。やがて起るであろう国境問題を予期しての援助なのかも知れない。トーレスの人々が独立することも将来全く無いとは言えないであろう。今後のトーレス海峡諸島民の生活文化の変化に注目しなければならないのである。

* * * *

ハモンド島の調査は島に住み込みなかったという欠陥があったが、ダーンレイ、マビオグ、マリー、ヨーク島では島に住み込み、各々数多くの資料が集められた。9月15日マビオグ島から松本君が引揚げたのを最後に各島の調査は終り、木曜島で残余の資料を集め、9月19日帰路についたのである。なお藪内隊長らによってプリンスオブウェールズ島で、日本人集落跡（出稼ぎ漁民の集落）が発見されたことを付記しておく。

6. オーストラリアの野外博物館 ——Old Sydney Town——

調査終了後、ケアンズからポートモレスビーに出て、独立直後のパプア・ニューギニアをみる予定だった。しかし国内便であった路線が独立によって取消され、ポートモレスビーから先の便も全く予測のつかぬ状況となり、ブリスベン、シドニー経由で帰ることになった。ブリスベンではクイーンズランド博物館を訪ねた。煉瓦造りの教会風の建物。2階の半分強が民族学関係の展示場となっている。トーレス海峡諸島関係では、ダーンレイ島のドラム(ワループ)、スチーブン島のミイラ、マリー島やダーンレイ島の仮面、マリー島の呪術の石などがまとめて展示してある。トロブリアンド諸島の

木彫類、ビスマーク諸島ではニューアイルランド島のものが多い。ソロモン、ニューヘブリデス。パプア・ニューギニアではとくにセピックのものが集めてある。解説はタイプしたものが多く、小さくて読みづらい。展示物の配列もやや雑然としているように思う。なおクイーンズランド州の探検史の地図は詳しく興味をひいた。

ブリスベンは、ブリスベン川の曲流部にひろがっているが、河港近くにあるニューステッドハウスをみる。古い政府関係の建物で、クイーンズランド歴史協会もここにある。保存が必要な歴史的建物のリストなど入手する。19世紀の建物が大半を占めている。わが国でも明治時代の建物の保存が注目されているが、オーストラリアのような新大陸ではとくに重要なのである。

シドニー滞在中に、大分水嶺を越えて内陸の開拓拠点だったバサーストを訪ね、町の保存建物を見学したり、歴史(民俗)博物館へも出かけた。煉瓦建ての2階建てで4室ずつあり、1階の2室と2階の4室が展示場となっている。バサーストの歴史を物語る物品、とくに1830年、1850年代のゴールドラッシュ関係の資料や当時の町並など。アボリジンの物質文化も1室を使って展示していた。

Old Sydney Townは1974年11月にオープンし、1975年1月26日のオーストラリアデイに正式公開された野外博物館である。この野外博物館は165年前(1810年頃)のシドニーをできるだけ正確に再現しようとしている。ニューサウスウェールズ州観光局では観光コースの一つとしてOld Sydney Townを設定しており、鉄道とバス連絡、入場券をセットに

して宣伝している。

シドニー中央駅からニューカッスル行の急行列車に乗る。シドニー都心部の高層建築群が遠ざかっていく。ストラットフィールドは東京の赤羽といったところ。ポートジャクソンの奥にある入江を渡る。侵食からとり残された丘陵の平坦面を走る。ところどころ陥没した急崖や溺谷がみえる。約90分ゴスフォードで下車。この付近入江があり、美しい環境。シドニー通勤圏の限界付近にあたり高級住宅地域でもある。駅前から専用バスにて8km、緩やかな丘陵部ソマースビィ。大きな駐車場があり、Old Sydney Townの管理棟がある。ここは入場門でもあり、小展示場、売店、食堂がある。売店では歴史関係の文献の他に博物館内建物などの小型レプリカ、絵葉書、ぬり絵、バッジなどを販売している。エンデバー号の模型、シドニーの古図などの小展示もある。小学生の数団体が入場して賑やか。広々とした緩斜面がひろがり、川をせきとめて人工湖をつくり、シドニーコーブ(入江)を再現している。ソマースビィに建設用地を求めたのは、シドニーと地形が類似していたからである。案内を兼ねた地図

が2枚掲げてあり、古いシドニー(当博物館案内図となる)と、現在のシドニーを比較対照できるようにしている。案内書にも同じ配慮がみられる。

シドニーは1788年1月26日最初の移民団が上陸したところである。流刑植民地として船員、囚人、軍人が渡航したが、町の建設にあたって労働者が少なく、建物も粗末で、大部分は上陸後1年目に完成という状況であった。したがって、テント生活も多かった。このテントも復原してある。

現在のシドニーの都心部シティは整然とした街路構造だが、初期はかなり屈曲したものが多かったと言う。現在シドニーロック地区やパディントン地区には古い住宅街が残り、ロンドンではほとんど消滅したカーテンレース(写真5)が残っていて、近年その街区保存に努力している。しかしシドニー全体としてはアメリカ的な近代都市景観が優占しており、Old Sydney Townでオーストラリアの歴史的都市であるシドニーの姿を再現し、文化財保存への関心を高めようとしている。アメリカ合衆国のウィリアムスバーグと類似した新大陸型の野外博物館とい



写真5 シドニーの古い街区
パディントン
カーテンレースが有名

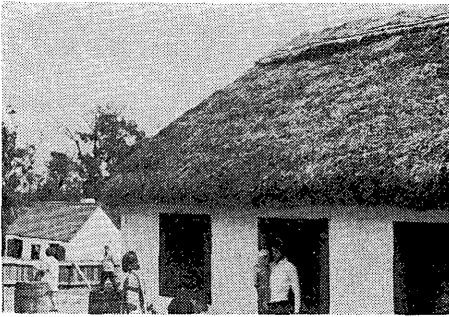


写真6 草葺船員の家

えるであろう。

ニューサウスウェールズ大学の建築家のグループは、シドニーの再現調査に5年の年月をかけ、植民地初期の道路、建物、生活慣習等々を6,000枚のカードにまとめたと言われる。時代的には1788年～1810年頃のシドニーの再現をめざしている。Old Sydney Townの立案者は、シドニーの建築家F.R. Fox氏で、すでに20年前にこの計画を考えつき、1969年アメリカ合衆国を訪問して古い町や村の再現をみてヒントを得ている。現在経営資金はフォックス家50%、ニューサウスウェールズ州25%、連邦政府25%である、半官半民営となっている。

場内は草葺や木片葺の民家、石造の教会、囚人の家、職人の家などテントを含

む42棟の建物が完成しているが、現在建築中のものも多い。道路も未舗装のまま、日用品も牛、馬車で運ぶようにしており、係官は当時の衣服をつけている。20世紀を持ちこまぬよう注意している。暖炉に薪を燃したり、兵屋では赤い軍服の兵士は子供に人気がある。屋根葺、車輪づくり職人、ブリキ職人、酒樽づくり、ローソク職人、織物をする人、陶器職人が各々の建物で実演をしている。生きた生活ある姿を再現しようとしている。北欧ストックホルムのスカンセンや、コペンハーゲンのフリーランド・ムセー（野外博物館）と似た生活ある博物館の構想をとり入れている。シドニーコーブ（入江）を模した人工湖に帆船が停泊している。ニューサウスウェールズ植民地初期にオーストラリアではじめて造られた船である。この入江に近く港湾関係の建物があり、入江の対岸ベネロング岬に当るところには小屋が建っているが、現在のシドニーではここに有名なオペラハウスが建っている。

Old Sydney Townが完全な姿となるのは10年後と言われる。101ヘクタールの広大な土地に86件、約200棟の建物が復原され、職員も140人になると言う。

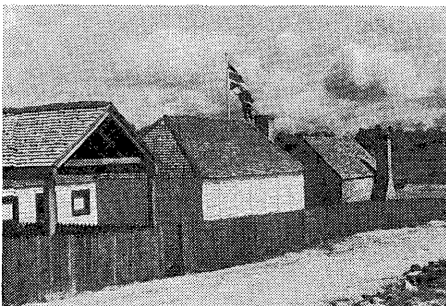


写真7 マックォーリー総督時代の兵屋
煉瓦、丸太式壁面に木片葺の屋根

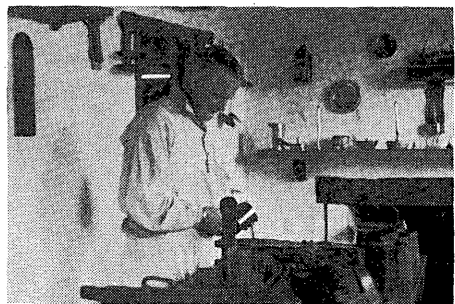


写真8 ブリキ職人の家
酒杯、皿、燭台などを作る

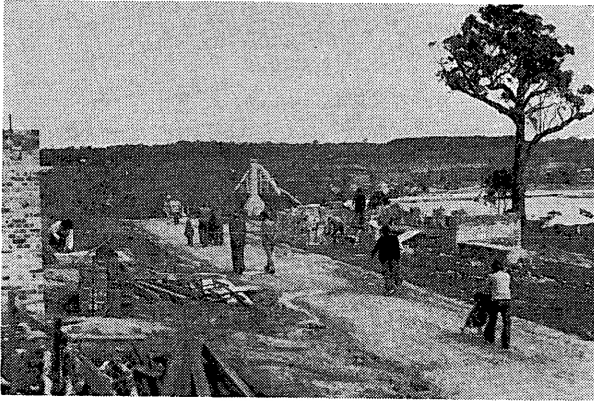


写真9 建設中のオールド
シドニータウン

右方はシドニーコーブ(入江)を
横した人工湖、帆船がみえる。

規模の大きな新大陸型野外博物館である。入場者は小学生の団体が圧倒的に多かった。歴史の浅いオーストラリアで歴史的都市と言われるシドニーの復原と当時の文化を一般にわかりやすく展示しようと努力している。野外博物館兼レクリエーションセンターとしての充実を考えているようであった。

文 献

- BECKETT, J.R., 1963, *Politics in the Torres Strait Islands*, Australian National University, Canberra.
- DUNCAN, H., 1974, *Socio-Economic Conditions in the Torres Strait*, The Torres Strait Islanders Vol. I, Research School of Pacific Studies,

- Dept. of Economics, Australian National University, Canberra.
- HADDON, A. C (ed.), 1901~1935, *Reports of Cambridge Anthropological Expedition to Torres Straits*, Vol. I-VI.
- IRVING, R. and CHISHOLM, P.M., 1974, *Old Sydney Town*, Old Sydney Town Pty Ltd.
- LAADE, W., 1971, *Oral traditions and written documents on the history and ethnography of Northern Torres Strait Islands*, Wiesbaden, F. Steiner.
- LAWRIE, Margaret., 1970, *Myths and Legends on Torres Strait*, University of Queensland Press.
- WALKER, D (ed.), 1972, *Bridge and Barrier, Natural and Cultural History of Torres Strait*, Research School of Pacific Studies, Dept. of Biogeography and Geomorphology, Australian National University.